

7 御所

古都の深層

文化

秘められた場の歴史

高木 博志

今年は、大政奉還150周年である。もっとも明治維新の記憶や語られ方は、明治、昭和とこの時代の変化によって、また語り手の立場によっても多様である。

今秋、一枚の絵、「戊辰之役之図」が、京都市左京区岡崎の星野画廊で初公開された。鳥羽伏見の戦いが勃発した慶応4（1868）年正月3日夜、喧嘩にみちた京都御所南西の公家門（宜秋門）前を活写する。この大作（81・4×143㎝）は、明治23（1890）年、第3回内国勸業博覧会に出品された。会場の上野公園は、戊辰戦争、彰義隊の記憶の場である。この秀作は、近い過去を描いた点

や、西洋の歴史画の影響を受け始めたそのリアリズムにおいて、突出していた。前年の帝国憲法発布にともなう「大赦」で、徳川幕府や会津藩・仙台藩などの賊軍の罪は許され、天皇のもとで平等な「臣民」とされた。そして大赦により江戸幕府の顕彰や江戸趣味がブームとなる、その一方で薩長主体の明治政府が船出した。絵の舞台となった公家門は、現在、春秋の御所一般公開の入り口である。江戸後期は観光スポットで、門前には酒肴を供する樽垣茶屋もあり旅人は参内する公家を見物する、のどかな風景であった。それが幕末の政局の中で、軍事的

のどかさ一変 政局の緊迫映す



鳥羽伏見の戦い勃発直後、御所の騒然とした雰囲気を描写した戊辰之役之図（星野画廊提供）

緊張みなぎる場と化したのである。

画家の名は、小波魚青。宇和島藩の砲術指南役の小波盛行を父に生まれ、幕末から明治にかけて京都に移り住み四糸派の長谷川玉峰に師事した。維新後、この絵が描かれた明治23年には長崎市内中町に住み、同地でなくなった。画面左下に魚青が「明治紀元正月三日夜、余は、公家御門守衛員と為りて、騒場中、親しく目撃する所なり。往時を回顧し其の真景を謹写す」とある。20歳すぎで公家門守衛の任に就いた魚青が、時間をおいて明治23年に描きたかったのは、宇和島藩そのものであった。

公家門前では、大砲が3門、西を向き、騎乗兵や鉄砲装備の宇和島藩兵が並んだ。白熊を被る本願寺の僧集団が武装し、幕府軍敗北の報に公家達が伴連れて参内する。駕籠に乗るのは、徳川慶喜や大名も参加する公議政体構想が敗れた、傷心の隠居・伊達宗城だろう。

明治維新後、薩長藩閥に置き去りにされた宇和島藩が、慶喜の政権復帰を主張する立場から倒幕へと巻き込まれる局面を描いた歴史画である。明治23年の大赦により、誰もが明治維新を語りうるようになって、一貫して「勤王」であったとの主張を込めて描かれたのではないか。春秋、観光客でにぎわう今日の公家門を目にすると、宇和島藩にとって、魚青にとって、「明治維新」とは何だったのかを考えさせられる。

（京都大人文科学研究所所長）